

学位論文内容の要旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">深澤（川崎） 南土実 【比較社会文化学専攻 平成22年度生】</p>	要 旨
論文題目	<p>バレエ・デ・シャンゼリゼ －第2次世界大戦後フランス・バレエの出発</p>	<p>本研究は、バレエ・デ・シャンゼリゼの全体像を明らかにし、本バレエ団の功績や役割を考察したうえで、このバレエ団をフランス・バレエ史上に位置づけることを目的としている。</p> <p>バレエ・デ・シャンゼリゼは、1945-1951年の約7年間、シャンゼリゼ劇場専属のバレエ団として存在し、戦後直後の混乱のなかで停滞していたパリ・オペラ座から飛び出した若手バレエ・ダンサーらと当時の一流の芸術家たちが革新的な作品を発表した、パリ・オペラ座と並ぶ戦後フランスを代表するバレエ団であった。しかしながら、バレエ・デ・シャンゼリゼの活動と上演作品についてはこれまでその全貌が明らかにされておらず、学術的な研究はほとんどなされていない。本研究は、先行研究で指摘されたような「新しいダンス」を生み出したこのバレエ団の活動の軌跡を、写真・映像資料、フランスとイギリスの当時の新聞・雑誌の批評や評価、バレエ団関係者の手記や著作等の一次資料をもとに考察を進め、フランス・バレエ史上にバレエ・デ・シャンゼリゼを位置づけようとした。</p> <p>第1章では、バレエ・デ・シャンゼリゼ誕生の経緯と契機を明らかにし、第2章では、バレエ・デ・シャンゼリゼ設立後の活動について上演作品を中心に考察した。第3章では、バレエ・デ・シャンゼリゼの「象徴」とも言える代表的作品《若者と死》を深く掘り下げて作品解釈を行い、第4章では、バレエ・デ・シャンゼリゼが1947年以降に発表した新作を中心に解散までのバレエ団の動向を明らかにし、バレエ団の遺産を考察した。</p> <p>本研究では、バレエ・デ・シャンゼリゼは、戦後直後の混乱の中で葛藤と模索を繰り返しつつも、戦前のダンスと戦後のダンスとの橋渡し役以上の、「新しいダンス」を切り開いたバレエ集団であり、第2次世界大戦後フランス・バレエの出発を担ったバレエ団であったと位置づけられると結論づけている。</p>
審査委員	(主査) 教授 猪崎 弥生	
	准教授 水村 真由美	
	教授 中村 俊直	
	教授 天野 知香	
	教授 鈴木 晶	